

研修生だより No.19 6/7～6/18

社会福祉法人建昌福祉会 帖佐すずらん保育園 福富

日付	時間	活動内容 & 場所
6月7日 (日)	12:03 17:00	デンマーク コペンハーゲン 出発 (電車移動) デンマーク オーデンセ 到着
6月9日 (火)	9:00	Haustruphave Børnehus (保育園・幼稚園統合型施設) 視察・質疑応答
6月10日 (水)	9:30 13:45	Søhus Børnehus (インクルーシブ型幼稚園) 視察・質疑応答 オーデンセ市児童・青少年課訪問 インタビュー ・児童・青少年局 保育施設利用調整担当者 ・児童・青少年局 インクルーシブ保育・特別支援 担当専門員
6月15日 (月)	14:45	ペダゴギー養成学校を卒業して、Youtube で子供の教育に関する発信をしている日本人の方へのインタビュー
6月16日 (火)	9:00	Børnehuset Overmarksgården (自然幼稚園) 視察・質疑応答
6月17日 (水)	9:00 14:50 20:45	デンマーク オーデンセ 出発 空港へ デンマーク コペンハーゲン空港出発 ドイツへ ドイツ フランクフルト空港出発 日本へ
6月18日 (木)	16:50	羽田空港 到着予定

デンマークのオーデンセは北欧神話の主神オーディンを祀る古代の聖地として始まり、中世には聖クヌート大聖堂を中心とした巡礼都市として発展しました。のちに産業都市として成長し、現在は文化都市として知られています。ここで生まれたアンデルセンは、貧しい家庭環境や中世の街並み、豊かな自然に囲まれて育ちました。これらの経験は『みにくいアヒルの子』に見られる疎外感や、自然描写の豊かさなど、彼の作品世界に深く影響を与えています。オーデンセの歴史と風景は、アンデルセンの感性を育てた重要な背景となっています。

そんなオーデンセの研修では、Haustrophave Børnehus（保育園・幼稚園統合型施設）Søhus Børnehus（インクルーシブ型幼稚園）、Børnehuset Overmarksgården（自然幼稚園）の見学・視察・質疑応答、オーデンセ市児童・青少年課訪問やペダゴギー養成学校を卒業した日本人のインタビューを実施しました。

1つ目の園である Haustrophave Børnehus を視察して最も印象的だったのは、遊びを中心に据えたデンマークの幼児教育理念が、環境構成と日々の実践にしっかりと反映されている点です。園内には多様な遊びのゾーンが丁寧に配置されていて、子どもが自ら興味を選び、遊び込めるよう工夫されていました。午前中は自由遊びの時間で、室内で過ごすことも可能ですが、実際には多くの子どもが戸外へ出て活動しており、自然の中での遊びが生活の中心にあることがよく分かりました。さらに、午後の12時から14時までは全園児が戸外で過ごす時間として定められており、外遊びが園の一日のリズムにしっかりと組み込まれている点が特徴的でした。

教育的支援の面では、デンマークの就学前教育カリキュラムに基づき、SprogTrappen（発達の階段）を用いた子どもたちの評価が体系的に行われていました。園の職員同士で子どもたち全員の発達状況を丁寧に把握し、その結果を保護者との面談で共有していました。こうした取り組みは、子どもの強みや課題を理解し、必要な支援につなげるための重要なプロセスとして位置づけられていると感じました。

また、この園では全園児の約30%がデンマーク語を母語としない家庭の子どもであることも特徴的でした。多文化背景をもつ子どもが多い環境では、早期の言語支援が将来の学習や社会参加に大きく影響するため、SprogTrappen を活用した継続的な観察と対話的な支援は非常に重要であると感じられました。

さらに、保育園部分では0歳から2歳10か月の子どもたちが、外に設置された小屋でベビーカーを使って午睡をしていました。北欧では戸外での午睡が一般的であると聞いてはいましたが、実際の環境を目にし、真冬でも同様に行うと説明を受けると、文化の違いを改めて強く実感しました。自然環境を前提とした生活文化が、保育のあり方にも深く根づいていることを象徴する光景でした。総じて、Haustrophave Børnehus は、環境構成・遊び・言語支援・生活文化のすべてが調和し、デンマークの幼児教育理念が日常の実践として自然に息づく園であったと感じました。



外の小屋内にある乳母車で午睡をする

2つ目の Søhus Børnehus の視察を通して、デンマークのインクルーシヴ保育の本質を強く感じることができました。特別支援グループは通常園とは別棟で運営されており、環境は白を基調に刺激を最小限に抑え、視覚支援を多用した「わかりやすく落ち着ける空間」が丁寧に整えられていました。壁面装飾をほとんど置かない方針は、子どもが安心して過ごすための環境づくりを最優先にしていることを示していたと思います。また、「すべての子どもは特性にかかわらず、さまざまな人と交わる権利がある」という理念のもと、通常園の子どもたちとの交流も、子どもの状態を見ながら柔軟に行われていました。決められた計画を機械的に実行するのではなく、目の前の子どもを深く理解し、その瞬間に最適な支援を選び取る保育者の資質が重要であることを改めて実感しました。



特別支援枠の取り組みは開始から1年ほどとのことだが、ここで培われる知見は通常保育にも還元され、園全体の質を高める循環が生まれているという点も印象的でした。乳児・幼児グループの視察では、北欧の園に共通する「明確なゾーニング」と「子どもがやりたいことを選べる環境」がしっかりと整えられていました。乳児グループでは「人生で初めて親から離れて過ごす場として、別の大人も安心できる存在であることを伝える」という言葉に深い共感を覚えました。幼児グループでは、環境設定が目的をもって構成され、子どもの姿に応じて頻繁に変更されていることを知り、ここでも“子どもを見る力”の重要性を再確認できました。

一人ひとりに合わせて作られる視覚支援

さらに、6名ほどの小グループで日々生活する仕組みは、一人ひとりを丁寧に理解するための効果的な方法であり、保育者が固定されず日々入れ替わることで、多様な関わりが生まれている点も特徴的でした。また、民主主義教育が日常的に行われ、遊びの決定に多数決を取り入れるなど、幼い頃から「自分の意見を持ち、社会に参加する」経験が保障されていることにも強い印象を受けました。

オーデンセ市児童・青少年課訪問し、保育施設利用調整担当者とインクルーシヴ保育・特別支援担当専門員へのインタビューを実施しました。特別支援や保育に対する理念が、制度と実践の両面で一貫して「子どもを一人の人として尊重する」ことを基盤にしていると強く感じました。デンマークでは妊娠期から自治体の保健師が家庭を担当し、出生後すぐに家庭訪問を行うようです。そこで育休の取得状況や保育開始の希望時期を確認し、自治体が保育枠を調整する仕組みが整っています。両親には最大48週間の育児休暇が保障されているようで、家庭ごとに復職時期が異なるため、早期の把握が不可欠だそうです。

特別支援において印象的だったのは、診断名に依存しない姿勢です。デンマークでは、病名を支援の前提とせず、「その子が園でどのように過ごせるか」「どのような環境や関わりが必要か」を中心に考えます。PPR（心理・教育・言語の専門チーム）も診断ではなく環境調整を重視し、子どもの参加と安心を保障する支援を提案するようです。診断名が先行すると特別支援児が

増えるという“診断文化”への反省から、デンマークは「病名ではなく子どもを見る」方向へ政策転換してきたと聞きました。これにより不必要な診断が減り、支援が本来の姿に戻ったとも話されていました。

保育理念の構造も特徴的で、国の保育法を基盤に、市議会が地域の実情に合わせて理念を具体化し、さらに担当課が現場向けのテーマへと落とし込むようでした。オーデンセ市の現在のテーマである「すべての子どもには友達を得る権利がある」「オーデンセの子どもであることに喜びを感じられるように」は、子どもの権利を中心に据えたデンマークの価値観を象徴していると感じます。子どもは年齢に応じて所属し、意見を持ち、社会に参加する権利を持つ存在であり、大人と子どもを対等な“人”として尊重する文化が深く根づいていると確信しました。これらの理念と制度が、保育者の専門性と結びつき、子ども一人ひとりの尊厳を守る保育を支えていることを実感しました。

デンマーク在住の日本人で YouTube チャンネル「デンマーク教育ラボ」を運営しているペゴ氏へインタビューさせていただきました。この話を通じて、デンマークの教育と社会の根底にある価値観がより深く理解できたように感じます。まず印象的だったのは、デンマークに暮らす人々が「経済的安心感」と「人への信頼感」を強く持ち、それが“生きやすさ”につながっているという点です。社会全体が人を信頼し、失敗を許容し、互いを支え合う文化が、教育の中にも深く反映されているだろうと感じました。教育の中心にあるのは、答えや結果ではなく、過程を重視する姿勢です。子どもがどのように考え、どのように選び、どのように行動したかというプロセスこそが学びの核心になるのではないのでしょうか。乳幼児期から遊びを通して多様な経験を積み重ねることが重視され、遊びは単なる余暇ではなく、社会性・創造性・自己理解を育む重要な学びの場として位置づけられているのだと改めて確信しました。

また、ペゴ氏が特に強調していたのは、「子どもが幸福であるためには、大人も幸福である必要がある」という視点です。大人のウェルビーイングが保たれてこそ、子どもに安定した関わりができるという考え方は、デンマークの教育文化の根幹にあるのだと思います。

さらに、乳幼児期からの「選択の経験」も重要視されます。子どもは自分で選び、その理由を語ることで、自分の意思を言語化し、他者と対話する力を育むことができます。そして、自分で選んだことには責任が伴うという感覚を、日々の生活の中で自然に身につけていくのです。この一連のプロセスが、民主主義社会の基盤となる市民性を育てていると感じます。

これらの考え方は、ペゴ氏の YouTube チャンネルで語られている内容とも深く一致しており、デンマークの教育哲学が一貫して「人を信じ、過程を尊重し、幸福を共有する文化」に根ざしていることが改めて確認できました。

研修最後は Børnehuset Overmarksgården（自然園）を視察しました。最も印象的だったのは、広大な園庭を中心に据えた環境づくりです。圧倒的な広さを誇り、自然の中で遊ぶことを保育の核にしている園の理念が、環境そのものに明確に表れている印象でした。園のテーマが「自然と外遊び」であるため、視察時には室内で遊ぶ子どもが一人もおらず、すべての子どもが戸外で活動していたことは特に印象深かったです。自然環境を最大限に活かし、子どもが主体的に遊び込

める環境を整えるというデンマークの保育観が、日常の実践として確立していることを強く感じました。

保育内容については、デンマーク全体で大切にされている理念がそのまま息づいており、ペダゴギー（保育者）が常に専門性をもって子ども理解と環境設定に取り組んでいる点が特徴的であったと感じています。環境や活動には明確な目的があり、「子どもにどう育ってほしいのか」という視点が一貫して保育の判断基準になっていました。こ



園庭の先が見えないくらい広大な広さ

れは単に自然の中で遊ばせるという表面的な実践ではなく、子どもの発達を深く理解したうえで環境を構成し、遊びを通して育ちを支えるという専門職としての姿勢が根底にあると思います。視察を通して、保育者の専門性が保育の質を支えていることを改めて実感しました。

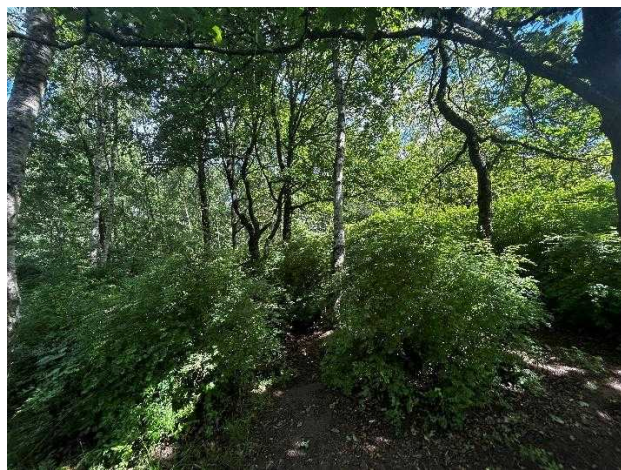
さらに、子どもの成長を支えるうえで保護者との連携が不可欠であるという点も強調されていました。家庭と園が協働し、子どもの育ちを共有しながら支えていく姿勢は、デンマークの保育に共通する文化です。また、国が定める6つのカリキュラムテーマを常に意識しながら保育を組み立てていることも印象的でした。これらのテーマは、子どもの全人的な成長を保障するための枠組みであり、保育者は日々の活動を通してそれらを実践的に落とし込んでいると思います。

Børnehuset Overmarksgården は自然環境を最大限に活かしつつ、専門性と理念に基づいた保育を実践する園でした。環境・理念・専門性が一体となった保育の姿は、日本の保育を考えるうえでも多くのヒントを与えてくれるものであったと感じています。

その他、写真をいくつかピックアップ！！



夏には子どもたちと火を使って活動することも
(Haustruphave Børnehus)



園庭の中に森が！本当に充実した保育環境
(Søhus Børnehus)



刺激の少ない色や保育環境の用意が大切
(Søhus Børnehus)



剥製や骨の標本など「本物」を展示している
(Børnehuset Overmarksgården)

デンマーク文化の
勉強！！

研修最後の国！デンマーク文化の学びも、やっぱり研修の学びをさらに深めてくれました！



あっという間の 60 日間でした。様々な国や地域に出向き、自分の目で、耳で、肌で、多くの学びを得ることができました。これは、この研修に参加した私にしか得られない、かけがえのない経験だったと感じています。

今後は、この学びをどのように還元していくかが大切です。今回の海外研修は終わりとなりますが、ここからが新たなスタート。日本に帰ってからも、この経験を生かしながら取り組みを続けていきたいと思ひます。

貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。